

二〇一一年 センター試験 漢文 解説速報

【全体解説】

出題形式としては大きな変更はないが、問5の空欄補充と問6の構成と意図を問う問題が、今までなかった目新しいタイプの問題であった。ただ特に難しい設問はなく、難易度としては、ほぼ平年並みと言ってよい。

「六経の学を言うは」という出だしですぐ気づいたと思うが、作者は元代に儒林四傑と呼ばれた儒学者で、内容は学問論である。この手の文章は何度もやったので、授業を思い出してくれば、読み解くポイントはすぐにわかったことと思う。テーマと展開を押さえれば、比較的容易に読み解けたはずである。

「主題」と「論証」という展開パターンについては、レギュラーの授業では何度も繰り返し練習したし、現役生には短期攻略ゼミで伝授した。この文章の主題は、もちろん最初の文で提示された「遜」と「敏」である。そしてそれを三つの段落で展開して、第一段落が主題、第二段落が論証(例示)、そして第三段落が結論ということはずぐわかったことと思う。そこさえつかめれば、ほとんどの設問に答えられたはずである。

【設問解説】

問1 最近、問1の内容は毎年変わっているのですが、正直予測がつかない。今年(1)は漢字の意味、(2)は単語の意味と、枝間で問うものが異なった。「偏」は「偏向・偏差値」などと言うように「かたよった」という意味であるから、当然⑤が正解。一方「所以」は、受験生をなめてんのかと思うくらいの基本単語、意味は「原因・理由、手段・方法」。選択肢に「理由」がないので、正解はもちろん④しかない。

問2 すぐ気づいたように「遜は…、敏は…。」という対句。「欲+動詞」は「〜んと欲す」で「〜しようとする」、「其の」は代名詞で下に動詞を取るときは主格を表した。そこで選択肢を横に見ると、「遜とは、自分は謙虚でありたいと思うのだが／あるうとしているが」と「敏とは、自分は進んで学びたいのだが／学ぼうとしているが」という部分は、ほぼ正確な訳になつているとわかる。とすれば、求められているのは「如有所不能」と「如有所不及」の意味である。それぞれ直訳すれば「できないことがあるようだ」「およばないことがあるようだ」。両方とも合っているのは②しかない。①は「言わないほうがいい」が不可、③は「人に対抗できそうにない」が不可。④⑤は論外。

問3 センターおなじみの書き下しと解釈を組み合わせた問題。解き方はまず書き下しの方から選択肢を絞り込む。途中の「也」は「や」だから、①②が消える。ついで「曷ぞ嘗て」とくれば反語だろうから③が消える。

これで④⑤の二択に絞り込めた。よく見ると⑤は「敏に貴ばれ」と訳のわからない受け身に読んでいるので不可。よって④が正解。書き下しが決まれば、それに合う解釈を選ぶのは簡単で、③が正解。易しい。

問4 理由を問う問題だが、段落の最後の文なので、答は当然この段落の中にある。まず傍線部の意味を確認すると「どうして本当に敏でないことがあるのか、いや敏であったはずだ」。何の話だったかというところ、孔子の顔回と曾参のこと。この二人が孔子の高弟であることは、うすすら記憶があつたはず。とすれば、二人は他の三千の弟子たちよりも「敏」であつたに決まっている。そうすると正解は①しかない。

問5 センターには珍しい穴埋め問題。入れるのは選択肢を見ればわかるとおり、「遜」と「敏」。短い段落なので、段落全体の流れを考えると、前半で「ただ自らを卑しむだけでは、退くを知りて進むを知らず」だと言っている。とすれば、「遜」だけじゃだめだと言っているのだと見当がつく。「Iは美德と雖も、然れども必ずIIなれば則ち功有り」と逆接になっているので、Iが「遜」で、IIが「敏」であるとわかる。最後は「重んずる所は尤もIIIに在るなり」と言っているのだから、「敏」でなければ具合が悪い。よって、⑤が正解。

問6 最後は定番の内容合致問題ではなく、ちよつとひねつた出題をしてきた。けれど、僕の授業では段落構成を考えて、「主題」と「論証」で読み解くということをさんざんやって来たので、この設問を見たときには思わず「やった！」とガッツポーズ。僕の授業を受けてきた生徒さんたちは、皆楽勝だったのでないでしょうか。

第一段落は「主題の提示」で、「遜」と「敏」とは何かという説明。第二段落は、「論証」で、孔子と顔回・曾参が「遜」で「敏」であつたという例を挙げている。そして第三段落は、でも「遜」より「敏」の方が重要と言っている。これは第一・第二段落では述べられていなかったことなので、筆者の意見と思われる。したがって構成は①が正解となる。

(1)が解ければ、「筆者の意図」は第三段落に書かれていることに絞ればよいとわかる。選択肢の中で、第三段落の内容に合致するものは、「人の教えを受け入れているだけでは進歩しない」と言っている④であるとわかる。

【書き下し文】

六経の学を言ふは、肇めて武丁の説に命ずるに見ゆるも、而れども学を為すの道を論じては、遜と曰ひ、敏と曰ふのみ。遜とは其の謙退せんと欲して、能はざる所有るがごとくするなり。敏とは其の進修せんと欲して、及ばざる所有るがごとくするなり。退くは則ち虚しくして人に受け、進むは則ち勤めて以て己を励ますなり。二者は固より偏廃すべからざるなり。

孔子は大聖人なれども自らは聖とせず。故に「我生まれながらにして之を知る者に非ず」と曰ふは遜と謂ふべし。而して又た「古へを好み、敏にして以て之を求めたる者なり」と曰ふは則ち其の之を求むるや、曷ぞ嘗て敏を貴ばざらんや。他日、顔・曾の二子と仁と孝とを言ひて、二子は皆自ら敏ならずと謂ふ。其の遜なること抑見るべし。回の仁、参の孝も、三千の徒、未だ之に先んずること或る能はず。豈に真に敏ならざる者ならんや。

苟しくも自ら卑しむるを為して自ら強むる所以を思はざるは、是れ退くを知りて進むを知らずと謂ふ。蓋し遜は美德と雖も、然れども必ず敏ならば則ち功有り。是に由りて之を言はば、則ち学を為すの道、重んずる所は尤も敏に在るなり。

【現代語訳】

詩経や書経など儒家の經典に学問について述べてあるのは、殷の武丁が傳説に答えるように命じたのが最初であるが、学問をおさめる道を論じているのは、「遜」と言い、「敏」と言っているだけである。「遜」とは自分は謙虚であろうとしても、なかなかできないことがあるように思うことである。「敏」とは自分から進んで学ぼうとしても、到底およばないことがあり、進取とは勤めて自分を励まし努力することである。この「遜」と「敏」の二者はもともとどちらか一方だけを廃したりはいけなないものなのである。

孔子は大聖人であるが、自分を聖人であると言ったことはない。だから、「私は生まれながら道について知っていたわけではないよ」と言ったのは、「遜」だということができる。そしてまた「古を好んで一所懸命に道を追求している者だよ」と言ったのは、彼が道を追求するのに、どうして「敏」を貴ばなかったことがあるのか。またある日、顔回と曾参の二人の弟子と仁と孝について話をしたときに、二人はどちらも自分を「敏」ではないと言った。彼らが「遜」であることは、ここに見ることができよう。顔回の仁も曾参の孝も、孔子の三千人と言われる弟子たちの誰もそれに先んずることができるようなものではないのだから。どうして顔回と曾参が本当に「敏」でないことなどあろうか。

もしもただ自分を卑下するだけで自分から進んで努力する方法を考えないのなら、それは退くことは知っていても進むことを知らないというものだ。思うに、「遜」は美德ではあるけれども、「敏」であって初めて功を遂げられるものなのだ。こう考えてくると、学問をなす道で重んずるものは、とりわけ「敏」の方にあると思われるのである。

出典は、元の儒学者黄潛の「金華黄先生文集」

【追記】

短期攻略ゼミや冬期講習の「センター漢文ゼミ」を受講した現役生は、「本当に受けておいてよかった」と思ったことでしょう。短時間でしたが、あの時やったセンター解法のポイント、①段落間の関係を考えながら読む、②どれが「主題」で、どれが「論証(比喩・例示)」かを考えながら読む、③主題と結論は最初と最後にあることが多い、がそっくり当てはまる出題だったので、きちんと覚えて復習をした人は、さほど苦労をせずに解けたのではないかと思います。